

實用兒童學講義

中村 五六

三、身体の生長

一、初生兒の狀態 幼兒を育つる上に先づ第一に承知す可きものは其子供の体格が普通一般の幼兒に比較して健康なりや否やと云ふことであるが是には諸學者の調査があつて夫れ々々標準とす可きものがある。其中でも体重は最も重要な目安である。

是に就いて三島醫學博士の調査したる結果は左表の通りである。

女兒 二八七〇グラム(七七二匁)
男兒 三〇四〇グラム(八一〇匁)

其他諸學者の調査したる所も之と大同小異で少くも二八〇〇より輕らざるを以て普通健康兒の標準とす可きものゝ様である。西洋人の子供は一体に之より多く其平均体重は一般に三二五〇グラムとされて居る。之れに因て見ると我國の初生兒は概して西洋人のよりは五六十匁ばかり輕いものと云

ふことが出来る。
次に同博士の調査したる身長は

女兒 四八、七センチメートル、(二尺六寸三分)
男兒 四九、一センチメートル、(二尺六寸七分)

是も西洋人の幼兒平均身長に比すると約一センチメートル小さいと云うのである。

頭圍は三二乃至三七センチメートルで女兒は男兒より半センチメートル小いのが普通で是が初生兒の体中最も長き直徑を有する部分である。後來大きくなる可き胸圍も初生の時は通常頭圍よりも一

二センチメートル小さがきまりである。併し此割合は生後少きも三ヶ月、多きは四五月份迄維持される丈でそれから後は胸圍は浸々として膨大して滿二十一月にして頭圍胸圍相等しくなり

是より後は胸圍は常に頭圍を遙に凌駕するものである。

以上は我國に於ける初生兒の体格の統計的結果であつて幼兒の体格を判定するに必要なる科學的根據ではあるが尙其他に幼兒の健康を判定す可き參考材料が數多ある様に思ふ。初生兒の泣き聲など



も其一つである。若し其子が充分に能く發育した子供であるならば其産聲と云ふものは可なり大きな聲即ち音量が可なり多くなければならぬ筈であるが若し體質虚弱なものであると然様な大聲は出し得ないものである。又皮膚は必ず赤色を呈して居なければならぬ。是が赤ん坊と云ふ名稱の生じた所以である。概して老人などの云ふのには赤色の強い程其子供は色の白い子である。云ふて居る夫れ、兎に角生れた瞬間に赤色反應の強い程健康な子供であると云ふのは確かなことである。其他頭髮は房々と密生して居るのや身体の各部手足などか全体肉づいて圓み勝になつて居るのは何れも發育の充分な證據であると思つて差支ないものである。勿論子供々に因つて寸尺や目方其他の状況に多少の異状のあるのは當然の事ではあるが以上述べた處を標準として之を距ること遠からざるものならば先づ健康なものと思つて然る可しである。若し又此等の標準に適應せず餘程健康の度や發達の具合が劣つて居るものであると云ふことならば其子供の養育には一層周到な注意を要するもので

ある。然らばとて決して心配するに及ばぬ逆も生長の望みがないとして落膽するにも當らぬ。斯る虚弱なものでも天命ある以上は細心之を愛育するならば必ず豫期以上の好果を得るゝと云ふ限らぬ。現に記者の知人の子息中にも或は並外れて虚弱であつたり、或は月足らずに早産したものでも看護者の周到なる愛育の結果今は何れも健全な生活をして居るものが幾人もある。故に初生兒の健康状態は養育上調査する必要があるが決して普通の体格がないからとて失望することは無用である。

二、体重の増加 幼兒の体重は生後直に増加するものではなくて通常は生後一日々々と却つて減量して行くもので如何にも心細い次第であるが其兒が健康な子供ならば第五日目に至ると漸時其減量と恢復して滿一週日即ち七夜の祝盃を擧ぐる時は再び生初の体量を有し居るものである。併し體質が虚弱であるとか又は體質は申分なくとも營養が母乳でなく牛乳、煉乳、又は其他の人工營養であると此恢復は中々一週日の中には出来ないもので

ある。母乳が幼児の發育に如何程必要であるかと云ふことは是でも判ることである。

是より以後幼児の体重は日々二〇乃至三〇瓦宛増加して行つて滿四ヶ月の頃には殆んど生初の時の二倍位になるものである。晩くも半年に達する頃には必ず倍加するものである。而して是より以後は日々増加量は前程に急ではなくて平均一〇乃至一五グラム宛の増加で滿一年に達する頃には生初の時の三倍となるものである。之が最初の祝誕生日に於ける健康兒の資格である。

尙是より後の發育は次表の通りである(三島博士)

年齢	男兒	女兒
1.	9.0	8.5
2.	10.6	9.9
3.	12.4	11.5
4.	13.7	12.9
5.	15.2	14.5
6.	16.5	16.5
7.	17.8	17.2
8.	19.1	18.7
9.	21.0	20.5
10.	23.0	22.3
11.	25.0	24.4
12.	27.0	27.8
13.	29.8	31.4
14.	33.6	36.5
15.	38.7	38.2

以上の表に因つて見ると子供が滿六年となつて小学校に入學する時には生初の時の体重に比して少くも五倍の重さを持つて居なければならず尋常小学校を了つて中學校に移つたときには九倍の体量を有するを以て普通のものとするのである。

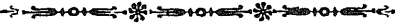
身長増加 身長増加は体量の様に迅速でない
 幼児最初の一年間には多くは

男 二四、四センチメートル
 女 二四、二センチメートル

の發育をする、是を西洋に於ける幼児初年の發育量一九、八(男兒)に比すると著るしき違である是は如何なる理由に基くかと云ふに三島博士は我國氣候の溫和なると哺乳の偏に母乳に因る結果であると云はれて居る。果して然りとせば我國は實に小兒の樂園であると云はねばならぬ。左に同博士の調査に係る發育表を示さう。

此表の示す所に因ると子供の小学校に入るときは正に生初の時の二倍に伸長し更に高等小学校を了つた時に其三倍に達するものであることが知れる頭圍及胸圍の膨大 初生兒の頭圍は三三乃至三五センチメートル即ち曲尺で一尺一寸乃至一尺二

年齢	男	女
1	73.5	72.9
2	79.5	98.9
3	85.4	84.9
4	91.7	91.0
5	97.4	96.5
6	102.8	102.4
7	108.3	107.2
8	113.8	112.0
9	118.3	116.2
10	122.8	120.4
11	127.0	125.9
12	130.8	132.3
13	135.2	139.0
14	141.5	143.2
15	146.3	144.7



寸位であるが七ヶ月の後、幼児の足投げ座りをする頃には四四センチメートル即ち約一尺五寸許りとなり二十一ヶ月の後、二た誕生前頃には四七センチメートルとなつて胸圍と相等しき大ききさとなるものである。

初生児の胸圍 平均三一センチメートル 即約一尺位で七ヶ月後には四三センチメートル二十一ヶ月後には頭圍と同大となり是より以後胸圍は益々膨大して遂には遙に頭圍を凌ぐ様になるものである。

胸圍と身長とを比較することは幼児の健康を判定する上に最も必要のことである。今三島博士の調査に因つて計算して見ると身長と胸圍との比は三と二即ち胸圍は身長の三分の二であつて半身長より長ずること實に八センチである。併し虚弱な子供は斯る發育をして居らず時には半身長位しかないものもあるをうた。

手と足 兩手を水平に左右に上げた時の中指と中指との距離を指極と云ふのであるが此指極は西洋人は身長と同長か又は夫れ以上にあるのが普通である。

短いのがある。然るに本邦人の指極は何れも身長より多少短いのが通例だそうた即ち次表の通りである。

年	男	女
生初	46.6	46.3
1	71.1	70.0
2	77.3	76.4
3	83.6	82.7
4	89.5	88.2
5	94.3	93.4
6	98.9	98.6
7	105.0	103.3
8	109.0	107.4
9	114.2	112.5
10	119.2	118.1
11	123.7	123.2
12	127.9	128.3
13	133.3	134.5
14	138.6	140.2
15	144.7	141.7

足の長は元來身長の上にあるの普通である。尤初生時は歐洲人も下体は身長に達しない。凡そ六才になると下体は身長に均し以後は下肢の生長速かにして遂には全身長に對して常に五十一乃至五十五パーセントの比例を保つて居るをであるが本邦人は成人でも多くは四九、六位である。詳しくは次表に因つて判るであらう。

年	男	女
生初	14.0	13.8
1	32.5	31.6
2	35.9	35.1
3	39.2	38.5
4	43.0	42.2
5	46.5	45.8
6	50.4	50.2
7	53.4	52.5
8	56.3	54.9
9	58.6	57.9
10	60.8	60.0
11	62.9	62.3
12	64.9	65.6
13	67.1	68.6
14	70.3	70.9
15	72.7	71.7

古來「赤子は寝て居る中に育つ」と云ふ説がありま
すが今子供を調べて見ると殊に世俚諺の意味深い
ことを知ることが出来ます。其譯は嘗て獨逸のロ
ベルトと云ふ學者の調べたと云ふのに臥して居る
人の身長は通常起つて居る人のに比して平均一、
三厘多く二十四時間起ち詰めた人の身長は常
のものに比して六厘位迄短いものたそうである
起きて居る中は段々短くなるものであるとしたら
ば身長は伸びるのは寝て居る時の外ない譯である
から前の俚諺は誠に意味のあることを云つたもの
と云はねばならぬ。

自治と愛情

虚 空 子

世の教育者たるものは、殊に愛といふ事を忘れて
はならぬと思ふ、しかし其の愛が多くは姑息の愛
に流れ易いのである、そこで眞の愛といふのは、
今少し子供に自治の習慣をつけて貰ひたい、袴の
紐が解けたといつては結んでやり、鼻が出たとい
つてはかんでやつたりしたのでは眞の愛とは言へ

ぬ、併し之が今日一般に親切な先生といつて歡迎
されて居るのである、勿論こんなことは面倒だと
いつて一向かまいつけぬ先生に較べては多少優れ
て居るには相違ないが、そんな事はお前にも出来
るだらうといつて、子供相應自身にやらせる様に
して、愈々出来ぬといふ時に手傳つてもやらせる
といふ先生から見ると劣つて居るだらうと信じる
何れにしても今少し子供に自治の習慣をつける様
にしたものだ、所謂子供をあまへさして仕舞て
は大變である、そこで子供に先生は私共を大事に
して可愛がつて下さるが、又我儘をいつても到底
自由にはならぬものと思はせねばならぬ、さりと
て又先生は無闇に怖いものと思はせてはならぬ、
今日一般の家庭等に於ては殊に後者の弊に陥つて
居るものが多い、そんな事をすると先生にいひつ
けると「いひ子供の方は天を非常に恐れて居る風
がある、大に憂ふべき事である、故に幼児の教育
に従事せらるゝ方は、威あつて猛からずとか寛嚴
宜しきに叶ふとか云ふ語を訓練上の大主義として
貰ひたいのである